

ニオイは身を助く

においを利用した防犯や防災用の製品が相次いで開発されている。犯人追跡、事故につながるかねない高速道路上の動物駆除、聴覚障害者への火災警報。においの力と可能性は、事件の解決や人命を救う現場にまで広がりをみせている。

(神元敦司、島康彦)



オオカミの尿を使った「ウルフピー」。サルや鹿の侵入を防ぐ



強盗に悪臭噴射

ツンと火災報知

ベンチャー企業の「一新商事」(神戸市)などが開発した「キャプチャー」。犯人に強烈なにおいの液剤を吹きつけ、追跡や特定につなげる。その名の通り、においで犯人を「捕まえる」システムだ。

仕組みはこうだ。コンビニなどに強盗が来た際、店員がボタンを押すと、1〜2ccの臭気液剤が、隠れたところにあるノズルから出てレジ付近にいる犯人に噴射される。すぐにおいがすると気付かれるため、3〜5分後にはおいは始めるのが特徴だ。「むれた靴下と家畜のにおい、鶏のふんが混ざり合った」という臭気は、せつけんや市販の消臭剤ではとれず、1週間は続く。警察犬による追跡にも役立つ。

同社の開発担当・大槻隆一さん(65)は「逃げる犯人はとにかくくさい。住民からの通報も期待できる」と話す。同社は4月の商品化に向け、警備会社と話し合いを進めている。工事費を含め、50万〜100万円程度の価格を想定。コンビニへの需要を見込み、10万円台の商品開発も

将来的には目指す。森本浩社長(46)は「罪を犯せば必ず捕まるという認識につなげた」と意気込む。

高速道路に出没するサルを追いつけよう、オオカミの尿のにおいを活用しているのが、中日本高速道路(NEXCO中日本)だ。

新名神高速道路のサービスエリアで一昨年春ごろ、残飯が目当てにニホンサルがよく目撃されていた。事故につながる事態はなかったが、同社は「サルが飛び出し、ドライパーが反射的に急にハンドルを切れば事故につながりかねない」と対応に乗り出した。

導入したのが、輸入商社「エイアイ企画」(東京)の動物忌避剤「ウルフピー」。オオカミの尿を殺菌して生成したもので、サービスエリアの周辺のフェンスに、約50リットル入りボトルを6〜8間隔でくくりつけた。ボトルのまわりに穴が開いており、においがそこから出る。人でも鼻を近づければわかるが、屋

外なら気にならないという。約340リットル入りボトルで8500円。

09年3月から使い始めたが、以来サルの侵入報告はない。同社は「サルにとつて、オオカミは天敵。効果はあるようだ」と話す。

すぐ目覚める威力

香りを使った製品を扱う「シームス」(東京)が開発したのが、わさびのにおいで火災を知らせる臭気発生装置だ。火災警報器が煙を感知すると、線につながった装置から臭気ガスが噴射される仕組み。わさび特有のツンとした強烈なにおいが広がる。同社の実験では、早い人で10秒、遅くとも3分以内に目を覚ますほどの威力だった。

同社が主な利用者に想定するのは、聴覚障害者や、耳の不自由なお年寄り。これまでも振動や光を使った装置はあったが、就寝中は気づかない恐れがあり、不安を感じる人が多かった。また、火災警報器のアラームに気づかない可能性があるため、ホテルなどで宿泊を断られてしまうケースも少なくないという。

価格は1セット5万円。同社の漆畑直樹社長は「火事に気づくかどうかは命に直結する問題。安心して暮らせる手助けになれば」と話す。